# 鷗外と明治という時代

福沢榮司

一九一二年九月十三日、明治天皇の棺が宮中正殿に設けられた殯宮から大喪の礼の青山練兵場へ向かった午後八時頃、それに合わせたように乃木希典夫妻は赤坂の自宅で自刃。殉死する。大喪の礼に参列していた鷗外はその日の日記に「途上、乃木希典夫妻の死を説くものあり。余半信半疑す」と記し、五日後の十八日には「午後乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津弥五右衛門を艸して中央公論に寄す」[*注1]と日記に認めている。これが以後鷗外を強く歴史小説へと傾斜させることになるが、殉死の衝撃は鷗外に限ったものではなかった。公表された乃木の遺言は次の文言ではじまっている。

自分此度御跡ヲ追ヒ奉リ自殺候段、恐入候儀、其罪ハ不軽存候。然ル処、明治十年役ニ於テ軍旗ヲ失ヒ、其後死処得度心掛候モ其機ヲ得ズ、皇恩ノ厚ニ浴シ、今日迄過分ノ御優遇ヲ蒙、追々老衰、最早御役ニ立候時モ無余日候折柄、此度ノ御大変、何共恐入候次第、茲ニ覚悟相定候事ニ候[*注2]

この乃木の忠誠心が衝撃を生み、やがて伝説的乃木像がつくられていく。伝説がすべてそうであるように、乃木伝説もまた明治という時代の色を強く持っていて、それは明治天皇へすべてが収斂していくような伝説であった。徳富蘆花は乃木の自刃について、

余は息を飲むで、眼を数行の記事に走らした。「尤だ、無理は無い、尤だ」。斯く呟きつつ、余は新聞を顔に打掩ふた。[注3]

と書いている。この〈尤だ、無理は無い、尤だ〉という直情的つぶやきは明治天皇がどれほど強く大きな存在であったかを示している。乃木について語った同じ本で蘆花は明治天皇への思いを次のように語っている。

陛下が崩御になれば年号も更る。其れを知らぬではないが、余は明治と云う年号は永久につづくものであるかの様に感じて居た。余は明治元年十月の生まれである。（中略）余は明治の齢を吾齢と思い馴れ、明治と同年だと誇りもし、恥ぢもして居た。陛下の崩御は明治史の巻を閉ぢた。明治が大正になって、余は吾生涯の中断されたかの様に感じた。明治天皇が余の半生を持って往っておしまひになつたかの様に感じた。[注4]

この率直さは蘆花ならではのものだが、漱石も、鷗外も部分的にはこの心情を共有していて、明治天皇の存在がアイデンティティの一部をなしている。大正三年（一九一四）に出た「こころ」では〈私の父〉や〈先生〉に次のように言わせている。

崩御の報知が傳へられた時、父は其新聞を手にして、「ああ、ああ」と云った。
「ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も・・・・・・・」
父は其後を云はなかった。[注5]

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残ってゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。[注6]

御大葬の夜私は何時もの通り書斎に坐って、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去った報知の如く聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去った報知にもなってゐたのです。私は号外を手にして、思はず妻に殉死だ殉死だと云ひました。[注7]

殉死の真の理由をうかがい知ることはできなくとも、〈明治の精神が天皇に始まって天皇に終わった〉と感じる〈先生〉にとっては乃木の死は乃木なりの明治という時代への精算であり、〈先生〉にも過去の精算を迫る迫力があった。親友Kを裏切ることによって得られた〈先生〉の結婚はアイデンティティの一部を犠牲にすることによって得られた明治日本の西欧化の暗喩であり、父の死、先生の自殺はそれぞれ明治天皇の死、乃木の殉死とパラレルな関係におかれている。

鷗外の「興津弥五右衛門の遺書」も時系列に並べられた作品群を見渡すとき、漱石のそれとは大きく違っているが、鷗外なりの明治という時代への思い入れと総括を、そしてその後の彼の文学活動を方向づける作品であった。

「興津弥五右衛門の遺書」の初版の書き出しは乃木の遺書に酷似している。

某儀今年今月今日切腹して相果候事奈何にも唐突の至にて、弥五右衛門奴老耄したるか、乱心したるか

と申候者も可有之候へ共、決して左様の事には無之候。某致仕候てより以来、当国船岡山の形ばかりなる草庵を営み罷在候へ共、先主人松向寺殿御逝去被遊て後、肥後国八代の城下を引払ひたる興津の一家は…

…

茶事のための珍しい品を買い求めるようにという三齊忠興公の命を受け、興津弥五右衛門は相役と二人で長崎に赴く。運良く伽羅の銘木が渡来していたが、その伽羅には本木と末木の二種があった。二人は本木を求めようとするが、仙台の伊達家の役人と競り合いになってしまう。値が上がりすぎたと感じた相役は〈假令主命なりとも、香木は無用の翫物に有之、過分の大金を擲候事は不可然、所詮本木を伊達家に譲り、末木を買い求めたき〉と言い出す。それに対し弥五右衛門は〈此度渡来候品の中にて、第一の珍物は彼伽羅に有之、其木に本末あれば、本木の方が尤物中の尤物たること勿論なり、それを手に入れてこそ主命を果たすに當るべけれ〉と主張し、互いに譲らず烈しい口論となる。激した相役は突然弥五右衛門に切りかかるが、逆に弥五右衛門に討たれてしまう。本木を買い求め帰国した弥五右衛門は三齊公に切腹を申し出るが許されず、伽羅は名香木として珍重され〈出格の御引立を蒙〉る。しかし弥五右衛門は〈御役に立つべき侍一人討ち果たした〉という思いが強く、三齊公の卒去の後あらためて切腹を申し出切腹を果たす。

この話は徹頭徹尾主君をめぐってのものだ。結果的とはいえ同僚を討ったのは主君の命に忠実であろうとしたがためであり、切腹を願ったのも主君の〈御役に立つべき侍〉を一人失わせたからであり、また殉死は仕える主君が亡くなったからだ。主君あっての興津弥五右衛門ということでこの話は貫かれている。近代的解釈からすれば相役の言には十分な理がある。彼の言うように武具ならいざ知らず、趣味の香木を値を競ってまで買うのは浪費だという方が正論とも言える。あるいは殉死にしても相役の肉親への償いの思いとした方が分かり

がいい。にもかかわらず鷗外が近代的解釈を一切退け、すべてが主君のためにという「興津弥五右衛門の遺書」を乃木殉死の衝撃から書いたのだとするなら、鷗外は乃木殉死の真意をひたすら明治天皇のためにという姿勢の中に見たということになる。たしかに乃木の遺書はただひたすら明治天皇を向いてはいるが、弥五右衛門殉死と乃木の殉死が質的に違うことは鷗外にはわかっていたはずだ。弥五右衛門の殉死が当時では限りなく自然死に近い死であったとすれば、乃木の死は同じ殉死でも決して自然死ではない、特異な死だ。「和魂洋才」という相反する要求を、あるいは「富国強兵」という難しい課題を同時に可能にさせなければならなかった時代の諸矛盾の調節弁としての天皇の死は、その矛盾を顕在化させた。乃木に引きつけて言うなら明治天皇のためならその矛盾に耐えることができたということだろう。それからするなら鷗外は乃木の殉死を「興津弥五右衛門の遺書」の世界と重ね合わせることで、一面では乃木の死を純化すると同時に、明治という時代のかかえる問題を封じ込めてしまったといえるかも知れない。引用したように「興津弥五右衛門の遺書」の書き出しは乃木の遺書なしにあり得ない。ただ鷗外と乃木は鷗外渡欧中からの間柄であり、鷗外の小倉転属に際しては新橋まで見送り、乃木の学習院長時代には白樺派の言論活動について鷗外に相談してもいる。それらのことが乃木の死を「興津弥五右衛門の遺書」に引きつけ、時代的意味を転化されることになっているかも知れない。

しかし翌年六月、単行本「意地」に収められた「興津弥五右衛門の遺書」は乃木色がすっかり抜け落ち、それは〈別物に見えるくらいの改修〉[注9]がなされ、〈ほとんど別の作品だといってよいほど〉[注10]になっていた。乃木の遺書を連想させた初稿の冒頭は次のように改まっていた。

某儀明日年来の宿望相達候て、妙解院殿御墓前に於いて首尾好く切腹いたし候事と相成候。然れば子孫の為め事の顚末書き残し置き度、京都なる弟又二郎宅に於いて筆を取り候。[注11]

改稿にあたって鷗外は「細川家記」などの新しいいくつかの史料にあたり、歴史考証的に厳正さを増している。しかしここでの問題はどんな史料にあたってどこを改めたかということより、乃木色が取り去られたことの意味を問うことだ。純粋に乃木の死をあつかったのでも、逆に興津弥五右衛門という一武士の殉死をあつかったのでもない、どちらかと言えば過去の人物と乃木像とが重ね合わされていた初稿から乃木色を取り除くことは、ほとんど明治時代の殉死の意味を問うことから完全に距離をとることを意味した。そう考えると鷗外文学にとってこの初稿と改稿のあいだの変化は相当大きな意味をもっており、初稿からの改稿が、つまり距離をとったということがまさに鷗外なりの明治という時代へのひとつの態度表明であったととることもできる。執筆時期でみるなら、「興津弥五右衛門の遺書」の初稿と改稿のあいだには「阿部一族」も書かれていて、まるで明治の終わりが鷗外の同時代との縁の切れ目ででもあったかのようにさえみえる。明治という時代の区切りに限らない。鷗外の文学歴をたどって驚くのは、明治時代の大きな節目がそのまま鷗外自身の文学的転機と重なりあうということだ。文学活動の時期が重なりあうだけではない。鷗外の生涯自体が明治期の日本の歩みをそのまま象徴しているとさえいえる。ドイツから帰国して文学活動の第一声をあげた明治二十二年（一八八九）は、それまで立法、司法、行政のすべての権力を唯一の機関である太政官がひきうけ、〈有司専制〉、とか〈政府あって国民なし〉といわれていた維新政府が立憲国家として立った、大日本帝国憲法発布の年であった。この時期の鷗外はドイツを舞台にした三部作「舞姫」、「うたかたの記」、「文づかい」を執筆し、それまでの戯作の伝統を抜け出した近代小説の確立に寄与し、坪内逍遙とは没理想論争を、あるいは「舞姫」をめぐっては石橋忍月に論駁するなどきわめて戦闘的であった。また文学外でも「東京医事新誌」の主筆として、その後は「医事新論」で論陣を張った。また東京美術学校の美術解剖学の講師となるなど、〈戦闘的啓蒙〉と呼ばれるような潑剌とした活躍をする。その後休眠状態に近かった鷗外が再び多産期をむかえる明治四十年（一九〇七）は日露

戦争凱旋帰国の翌年にあたり、明治の日本にとってもエポックメイキングな時期にあたっている。この時期日本の資本主義は驚異的な発展を見せ、産業資本の確立と独占の形成がすすみ、帝国主義列強への仲間入りを果たす。しかしその一方で急拵えの西欧化は戦費の増大、貧富の差、失業者の増大など、さまざまな社会問題を深刻化させてもいた。労働運動、農民運動、あるいは婦人運動は階級色を強め、堺利彦らが日本社会党を結成したのもこの時期であった。鷗外は第一師団軍医部長に復した後、陸軍軍医総監となり、医務局長に補せらて、官職としての頂点に上りつめた時期でもあった。この明治四十年からの四年間は木下杢太郎が〈豊熟の時代〉と呼ぶように、山県有朋を中心とした歌会常盤会を、また与謝野寛らと観潮楼歌会を興したのもこの時期である。雑誌「スバル」や荷風主宰の「三田文学」に「半日」、「キタ・セクスアリス」、「雁」、「青年」、「灰燼」などの寄稿を精力的に続けるが、この時期の特徴は「半日」のような身辺に題材を求めた、口語体の小説がはじめて書かれたことと、長編への試みがなされたことであった。この時期の傍観者的なまたある時は冷厳なリアリスト的な視線は「舞姫」における文語的ロマン的美文からするなら著しい変化であった。そして明治天皇の崩御以降、鷗外の文学は歴史考証的傾向を強め、歴史小説以外の作品においても、「余の立場」や「妄想」にあらわれているような、いわゆる résignation 的態度や挫折感が色濃く、精神的隠遁の様相を色濃くしてくる。この三様の変化はもう少し微細に見ていくと、鷗外の資質が時代との格闘で背負い込まざるをえなかった軌跡が、また明治という時代の陰影が浮かび上がってくる。

慶応四年（明治元年）三月の五カ条の誓文で

朕、幼弱を以て猝（にはか）に大統を紹（つ）ぎ、爾来、何を以て万国に対立し、列祖に事（つか）へ奉らんやと朝夕恐懼に堪ざる

なりと、述べた年若い明治天皇を先頭に、〈文明開化〉、〈富国強兵〉、〈殖産興業〉をスローガンとして廃藩置県、官制改革、地租改正、徴兵令と改革につぐ改革で、積極的に西欧文化を取り入れていった維新政府の必死な様子はただ年譜をなぞってみるだけで伝わってくる。必死な思いに圧倒されるばかりだ。〈文明開化〉や〈和魂洋才〉という意識変革が政治的スローガンとなるような革命期にあっては国民の私生活はストレートに政治を映し出す。森家の江戸から明治への、そして明治での変貌ぶりがほとんど明治国家のそれのミニチュア版のようにみえるのも当然だった。森家は祖父の生まれ変わりと言われた長男鷗外に期待をたくして、津和野から上京、鷗外は必死にその期待にこたえて学んでいく。よるべき藩をなくした今、洋学を身につけることが森家の再興の一番確かな手段であり、それは同時にないないづくしの維新政府の国家建設にもっとも必要なものでもあった。鷗外が家のために学ぶことは明治国家のために学ぶことと同義であった。鷗外が西洋医学を学ぶことはそのまま日本の近代医学の確立を意味していた。鷗外が東京大学医学部を卒業し、東京陸軍病院に勤めることになった明治十四年（一八八一）は、国会開設の詔勅が出され、十年後の国会開設をめざして板垣が自由党を結成、政変で追放された大隈も新党の準備をすすめるなど近代化、西欧化が加速していくときでもあった。鷗外はプロシャ陸軍衛生制度の調査や「医政全書稿本」全十二巻編述などの仕事をこなし、渡独が決まった明治十七年（一八四四）には、直接天皇から励ましの言葉を受けている。国家が自分を必要としていることが実感できたはずだ。横浜港を立つ前日、鷗外は日記に次のように書いた。

志に燃えた二十二才の若者の気概が伝わってくる。

初余之卒業於大學也。
蚤有航西之志。以為今之醫學。

初めて余の大学を卒業するや、蚤くも航西の志あり、以為く今の医学は泰西より来たる。縦使その文

自泰西來。縱使觀其文諷其音。
而苟非親履其境。則郢書燕耳。
至明治十四年叨辱學士稱。
（中略）
蓋神已飛於易北河畔矣。
未幾任軍醫。為軍醫本部僚屬。
躑躅鞅掌。汨没簿書案牘之間者。
三年於此。而今有茲行。
欲母喜不可得也。

を観その音を諷するとあれども、苟も親しくその境を履むに非ざれば、則ち郢書燕説たるのみと。明治十四年に至り学士の称を叨辱す。（中略）蓋し神は已に易北河畔に飛びたり。未だ幾もなく軍医に任じ、軍医本部の僚属となる。躑躅鞅掌して、簿書案牘の間に汨没すること三年。而うして今茲の行あり。喜び母しとするを得べからざるなり。[注12]

〈苟も親しくその境を履むに非ざれば、則郢書燕説たるのみ〉という気概に見合うだけのものを丸四年間の留学で鷗外が学んだことはまちがいない。爆発的な仕事量にそれはよくあらわれている。帰国翌年の明治二十二年（一八八九）からの二年間で医学関係に限っても「東京医事新誌」に約六十回、「衛生新誌」に約四十回、「医事新論」に約二十回と計百二十編もの寄稿がある。医学関係をのぞいた評論、随筆の数は明治二十二年に三十回、翌年には二十五回とほとんど信じがたい量の執筆を多分野にわたってこなしている。医学関係の論文の多くはいわゆる傍観機関論争に関わるもので、日本の医学界の現状批判であった。周知のように鷗外はドイツ滞在中、ナウマンの日本論と激しくやり合っている。ナウマンの日本紹介はお歯黒、粗食、アイヌ蔑視、盲人の多さ、伝染病や寄生虫の多さなどの後進性をあげる一方で、西欧文明の表面的受容は日本民族の弱体化につながるというものであった。それに対する鷗外の反論は強弁に近く苦しい。必死に西欧化を急ぐあまりの歪

みや、現状の風俗を見てだけのナウマンの紹介は西学東漸の思いで渡欧した鷗外には我慢ならなかったのだろう。ナウマンの日本紹介に対する激しい反論の仕方は、帰国後の自負と焦燥とがないまぜになったいわゆる〈傍観機関論争〉や石橋忍月との〈舞姫論争〉、坪内逍遙との〈没理想論争〉、外山正一との〈絵画論争〉などとよく似ている。西欧との落差がそのまま鷗外を駆り立てている感じがするが、どの論争にも共通しているのは為にする論の感が拭えず、都合のいい援用や知識量の誇示、議論のすりかえなど、勝つためには手段を選ばないような後味の悪さがあるということだ。これはナウマンに対しては強烈な日本弁護を展開し、国内では旧体制的なもろもろに立ち向かわなければならないという孤立した心理状態によるところが大きいと思うが、自分を持て余すような、苛立ちとさえ感じられ激しさはこの頃の鷗外の実生活にも帰因している面がある。この実生活をもふくめた現状打開のひとつの表現が「舞姫」に始まる初期三部作であった。

当時の鷗外は私生活にあっては西周夫妻の媒酌によって海軍中将男爵赤松則良長女登志子と結婚してまもなくの時期にあたっている。一見洋行帰りの将来を嘱望された青年の踏むべき道程を着実に踏んでいるように見えるが、内実はそうではなかった。帰国後すぐ赤松家との縁談をすすめるが、その一方で「舞姫」のエリスのモデルであるエリーゼが横浜港に到着。隠密裡に別れ話をすすめるという綱渡り状態にあった。鷗外自身はとても赤松家との縁談どころではなかっただろうが、森家としては是非まとめたい話しであった。そのためエリーゼの件では親族会議が開かれ、義弟小金井良精が交渉にあたり、結局三十五日後の十月十七日にエリーゼを帰国させる。そしてその三日後には母峰子は赤松家との縁談をすすめ、十一月二十二日に結納、翌年明治二十三年二月二十四日に結婚となる。鷗外の妹小金井喜美子は新妻の登志子に結婚一カ月後にエリーゼのことを尋ねられている。当時の鷗外の心情からしてもこの結婚には相当無理があった。この時期の手段を選ばぬような論争の仕方にはエリーゼ問題や結婚で自分の身の処し方をほとんど親族に委ねてしまわざるをえなかった私生活

での閉塞状況が影を落としているように見える。この間エリーゼの件が噂となり、職場でも、新婚の家庭生活でも直接口にしにくいだけに重くのしかかっていただろうことは想像にかたくない。妹喜美子は「舞姫」執筆前後のことを次のように述べている。

其中に舞姫をお書きになりました。ちらちら同僚などの噂にのぼるので、ご自分からさっぱりと打ち明けたお積でせう。（中略）暫く沈黙の続いた後、「ほんとによく書けていますね」といひ出したのは私でした。お祖母様はうなずきながら、「賀古さんは何と御言ひになるだろう。」「何昨夜見えたので読んで聞かせたら、己れの親分気分がよく出て居るとひどく喜んで、ぐづぐづ蔭言をいふ奴等に正面からぶつけてやるのはいい気持ちだ。一つ祝ひ酒をご馳走になろう」と又夜が更けました。それが春の国民之友に出て評判がよいものですから、今迄の何か心の底にあったこだわりがとれて、皆ほんとに喜んだのでした。[注13]

この「舞姫」に石橋忍月が批判を加える。それは〈恋愛と功名と両立せざる人生の境遇〉に主人公を置いて、功名を採らせたのは主人公の性格からして無理で、豊太郎の性格と行動に矛盾があるというものであった。「舞姫」前半の豊太郎の述懐と後半部の豊太郎の行動には矛盾がある。豊太郎が前半これまでの自分を〈操り人形〉のようだったとする自省が本物であるなら、たとえエリスと別れるにしてもあれほど操り人形的態度に終始することはない、いっそのこと前半部の豊太郎の生い立ちから今までを振り返る部分は無用ではないかというのが石橋忍月の「舞姫」評であった。しばらくして鷗外はそれに激しく反論する。この論争は結局数度の応酬の後忍月が筆を投げ、鷗外の完勝の形で終わるが、忍月の提起した豊太郎のエリスへの態度は〈近代的自我〉、〈父性〉、〈身体論的他有性〉などの問題としてさまざまに形を変えながら今なお存在している。しかし

「舞姫」執筆の直接の動機が私生活上の不如意からきており、エリーゼとのことで同僚たちにぐづぐづと蔭言を言わせぬように、また噂を聞き知っていた新妻登志子への暗黙の報告にあったと考えると豊太郎の性格的矛盾はある程度整理されて見えてくるように思える。「舞姫」の前半部、太田豊太郎の経歴をたどる部分、あるいは留学生活に慣れ親しんだ頃の心境を綴った箇所で印象深いのは次のようところだ。

官長はもと心のままに用ゐるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。獨立の思想を懐きて、人なみならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべき。危きは余が當時の地位なりけり。されどこれのみにては、なほ我地位を覆へすに足らざりけんを、日比伯林の留学生の中にて、或る勢力ある一群と余との間に、面白からぬ関係ありて、彼の人々は余を猜疑し、又遂に余を讒誣するに至りぬ。*注14

彼の人々は余が倶に麦酒の杯をも挙げず、球突きの棒をも取らぬを、かたくなる心と慾を制する力とに帰して、且は嘲り且は嫉みたりけん。されどこは余を知らねばなり。嗚呼、此故よしは、我身だに知らざりしを、怎でか人に知らるべき。わが心はかの合歓という木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす。我心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教を守りて、学の道をたどりしも、仕の道にあゆみしも、皆な勇気ありて能くしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさえ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、唯だ一条にたどりしのみ。余所に心の乱れざりしは、外物を棄てて顧みぬ程の勇気ありしにあらず、唯外物に恐れて自らわが手足を縛せしのみ。*注15

これらの一節にはそのまま当時日本食肯定論や、〈統計〉という訳語の是非をめぐって論を展開し、加えて

何よりもエリーゼとの事実関係についてよく知っていた石黒忠悳らが押し進めていた第一回日本医学会の開催に反対し、ために「東京医事新誌」主筆の座を追われた状況と、その際にエリーゼとのことが尾ひれをつけて話されたことへの強い弁明の意味が込められていたのではないか。また多分「舞姫」執筆と時期的に重なる十二月に陸軍系の「東京医事新誌」を追われるやいなや、「医事新論」を創刊し、「東京医事新誌」と真っ向から対立するようになる事態は、官位を危うくするほどの可能性もあったのではないか。そうした危険を敢えて鷗外に冒させたのはまさに四年間のドイツ滞在時の大学での自由な風であり、自己覚醒であった。「舞姫」の構成はエリスとの出会いによって主人公が自我に目覚めるのではなく、目覚めた後エリスに出会うとなっている。それ故に石橋忍月には無用ではないかと思われただろう滞欧時の以下のような思いが危険な医事論争に鷗外を駆り立てているのであり、鷗外としては自己確認のためにも書きとどめる必要があったのだ。

余は父の遺言を守り、母の教えに従い、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当たればにや、心の中になにとなく妥ならず、奥深く久しく潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらわれて、きのうまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今の世に雄飛すべき政治家になるにも宜しからず、また善く法典をそらんじて獄を断ずる法律家になるにもふさわしからざるを悟りたりと思ひぬ。余は私に思ふやう、我母は余を活きたる辞書となさんとし、我官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらぬは猶ほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。[*注16]

鷗外は忍月との論争で〈太田は或は帰東の念を断ちしも亦知る可からず彼は此念を断ちて大臣に対して面目を失ひたらば或は深く慙恚して自殺せしも亦知る可らず〉と述べているが、主人公豊太郎とエリスとの関係とその結末の付け方にはそれほどの選択肢はなかったはずだ。噂にたいする弁明の意図をはらませるかぎり、自殺や滞欧の結末は、登志子との実生活を考えてもありえない。公刊すれば新妻も眼にするであろう小説の構成は自ずから制約があった。〈弱性の人〉という非主体的受動的態度に終始する豊太郎の設定は唯一の選択ではなかったのか。エリスとの関係でどのように動こうともそれは実生活に微妙な波紋を投じる可能性があった。そのためには豊太郎は薄志弱行の人でなければならなかった。友人相沢謙吉の引き回しのお陰で太田豊太郎は決断を迫られずに済んでおり、そこに読者は煮えきらなさを感じてしまうのはたしかだが、この主体性を喪失した自分を責める卑下は、エリーゼへの懺悔である以上に、登志子との結婚の経緯での鷗外の非主体的態度を自身で責めているように読める。

> 恥かしきはわが鈍き心なり。余は我身一つの進退につきても、また我身に係らぬ他人の事につきても、決断ありと自ら心に誇りしが、此決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との関係を照らさんとするときは、頼みし胸中の鏡は曇りたり。[*注17]

華族赤松家との結婚を押し進める母峰子や親族の意志に逆らうこともせずただ受け身のままに結婚した自分を重ね合わせたために豊太郎の薄志弱行ぶりが強調されることになった面があるかも知れない。その分エリスの純粋さが際立ってくるが、無垢な聖性というエリス像は鷗外の悔恨の倒立像であって、きわめて理念的なものだ。聖性の故に豊太郎に過度な要求を突きつけてくる構図になっている。美化されたエリス像が「舞姫」成

功の一因であることは間違いないが、おそらく豊太郎がみずからの決断を迫られる場面を友人相沢謙吉の介在で回避したことよりはエリスが聖化して描かれていることの方がこの時期の鷗外にとって大きな意味を持っているように思える。「舞姫」も、「うたかたの記」も、「文つかい」もロマンチシズムあふれる悲恋であり、聖化された物語になっている。この初期三部作にあらわれた、とどかぬ恋のロマンチシズムこそがこの時期の鷗外を示している。たとえそれが悲劇的であっても後期の「阿部一族」のようなやりきれない悲劇性とは明瞭なコントラストをなしている。「舞姫」の豊太郎はもちろんだが、「うたかたの記」の画工巨勢や、「文つかい」の陸軍士官小林という日本人が狂言回しとして登場することが、西欧という憧れを身近に感じさせ、しかし異郷は異郷として薄いベールにくるまれたままにあり、そこでのかなわぬと知りつつ求めて止まない主人公たちの悲恋の抒情性は、当時の鷗外を物語ると同時に、右も左もわからぬままに西欧文化を必死で取り入れようとしていたこの時期の初々しい日本のひとつの心情でもあった。ただ西欧への憧れは憧れのままだが、やがていつかはという止みがたい心情が抒情性を醸し出している。鷗外が太田豊太郎の〈弱き心〉について忍月に、〈太田生は真の愛を知らず。然れども猶真に愛すべき人に逢はむ日には真にこれを愛すべき人物なり。〉[*注18]と述べている下りは愛すべき人とやがていつか恋の成就をと願う気持ちに西欧への憧れの心情吐露が重なってくる。初期三部作に共通した憧れのとどきがたい思いのロマン的リリシズムを、登場人物たちの心情告白は見事に実現している。鷗外の文語体は鷗外が自身の目で見、自身の頭で考えたことが素直に伝わってくる。それは硬直化し、類型化した旧来の文語文にはない魅力を持っている。たとえば次のようなエリスの描写や豊太郎の心情告白もきわめて自然で、自在な感じがあり、当時の文語文が否応なく持ってしまう美文調も類型化を免れている。

この青く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。[注19]

余がエリスを愛する情は、始めて相見し時よりあさくはあらぬに、いま我数奇を憐み、又別離を悲しみて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかかりたる、その美しき、いぢらしき姿は、……[注20]

「舞姫」に代表されるこの時期の鷗外の作品はどれも西欧への憧れと西欧化への夢が仮託され、それが伝統的な文語体に新しい表現を与えているといえる。

小倉時代「鷗外漁史とは誰ぞ」と「福岡日々新聞」に書いて、休筆状態にあった鷗外が再び旺盛な文学活動を再開したのは明治四十二年（一九〇九）雑誌「すばる」に掲載された「半日」からであった。じつに「舞姫」の執筆から二十年が経っている。しかし「半日」の鷗外は二十年前の「舞姫」の作者ではなかった。まったく別人の感がある。初期三部作のような果たせぬ思いへの詠嘆は消え失せ、描かれているのは嫁と姑の間を取り繕う男の姿であり、それは私小説作家のようでさえあった。

「半日」の筋はきわめて散文的だ。一月三十日の朝、何でもない母君の一言から〈奥さん〉のいつもの癇癪が爆発しそうになる。夫である文科大学教授文学博士高山峻蔵は急遽孝明天皇祭参列を取りやめ、ともかく〈奥さん〉のいらだちを和らげようと腐心する。高山博士は奥さんの不満のひとつひとつに答えながら、心の中で〈奥さん〉をあれこれと分析してみるが、そのうちコトコトと昼食の仕度をする音が聞こえてきて、〈奥

さん〉とのいさかいも強固な日常性のなかに吸い込まれ、深い溝は埋まらぬままに半日の幕間劇が終わったことを博士は知る。これが「半日」のあらすじだが、〈奥さん〉の不満は高山博士の母君に集中している。母君の存在そのものが気に入らないから、母君の声も、家計を取り仕切ることも、女房気取りでいることもすべてが〈奥さん〉の気持ちをいらだたせる。その度に高山博士は律儀に対応して〈奥さん〉を説得するのだが、〈奥さん〉が納得してくれると思っているわけではない。もう何度も繰り返されてきたことなのだ。心の中では〈奥さん〉のことを〈一體おれの妻のやうな女が一人とあるだらうか〉と考えている。意志の弱いことは特別で、嫌なことは一切せず、いかなる場合でも努めること、己に克つということが微塵もない〈奥さま〉は高山博士にとって理解不能の異人種のようにさえ思える。博士の母、つまり自分の姑を〈あの人〉としか云わず、食事であれ、何であれ姑とは同席しようとしない〈奥さん〉は博士の常識を越えている。理解できるのは〈奥さん〉の不満が嫉妬に起因しているというところまでだ。それとて真面目一方の夫には焼き餅の焼きようがなくて、仕方なく母君が嫉妬の対象に選ばれたようなものだと博士は考えている。そんな根拠のない嫉妬だというのに野放図な感情の解放をする〈奥さん〉はほとんど博士の理解を越えている。もし孝行とか恩とかにいささかの価値をおくならばとても口にできないような言葉を〈奥さん〉は平気で口にする。

いいえ。當前の人の聲なら、氣にはならなくつてよ。一通の人ではないのですものを。お金はみんなもって行って、好い加減にしてゐて、あなたをまで取ってしまはうと思ってゐるのですものを。ちょいと油断をすると、すぐあなたの側へ来る。あなたにはあれが當前に見えて。ええ。気味が悪い。[注21]

あの人とあなたとが、未亡人さんの処へ来た養子のやうになるとは、わたしも思ってはゐなくってよ。

年が寄っても気が若くて、誰かと夫婦のやうにしてゐたいのです。それだから會計をどうしても自分でするといふのです。[注22]

高山博士にしたら〈食ふ筈の肴を食はず、着る筈の着ものを着ずに、博士の學資を續けて、博士が其頃の貸費生といふものになりおほせる迄にしたのは、此母君の力〉のお陰であり、それに少しでも答えるのは褒められこそすれ、非難されるべきものでないと思っている。そんな気持ちを一顧だにしない様子を見ていると、ひょっとしたら〈奥さん〉には新しい家族観、夫婦観があっての主張ではないかと考えたりもするが、〈奥さん〉の口から出るのは迷信めいた姑の干支が丙午だから怖いとか、相性が悪いとかというとても非合理的な言葉しかなく、新しい家族観からの非難とはとても思えない。あれこれ自分なりに納得しようと〈奥さん〉のことを考えるが精神が病んでいるのだと考えないことには説明不能ではないかという考えに行き着いて高山博士は佇んでしまう。鷗外の「半日」執筆の動機が〈孝〉にあったことは一月三十日という日付が示している。「半日」はこの親を敬い、家族の大切さ考える孝明天皇祭のまさにこの日に、〈奥さん〉の不機嫌で一波乱あり、高山博士は孝明祭の参列を取りやめ、否応なく「孝」について考えをめぐらすことになるという皮肉な構造をしている。ここで鷗外が示したのは高山家の嫁姑の不和の処方箋でもなければ、新しい家族像の模索でもない。本当はもうすでにこわれてしまっている家族を懸垂状態で維持している男の姿だ。その姿はもはやないものをまるで存在するかのように振る舞う分戯画めき、演技めいてくる。男が本当に欲しいのはこの妻との二人で築かれる家庭ではなく、失われた過去の再現なのだ。

年寄は年の寄るのを忘れて、子供の事を思ってゐる。子供は勉強して、親を喜ばせるのを楽みにしてゐ

る。金も何もありやあしない。心と腕とが財産なのだ。それで内ぢゆう揃って、奮闘的生活をしてゐたのだ。その時は希望に光が家に満ちてゐて、親子兄弟が顔を合わせれば笑聲が起こったものだ。[注23]

失われたものへの郷愁が高山博士にある限り、たとえ〈奥さん〉にかわって、夜、子どもに手水をさせようが、火鉢に火を絶やさぬよう気を配ろうがこの溝は埋まらない。しかしその一方でもしこの博士の奮闘がなければ、高山家が家庭としての体をなさなくなるのも事実で、しかも博士の奮闘を支えている思いは孝であり、恩であるという逆説が「半日」の世界だ。〈真に愛すべき人に逢はむ日には真にこれを愛すべき人物なり〉とした「舞姫」の豊太郎の夢とは遠く隔たってしまった現実がここにある。

「半日」が発表された明治四十二年は一心不乱に励んできた国造りがひとつの目標に到達して一休止入れると同時に、その間に蓄積された疲労と無理がボディーブローのように効きだしてきた時期でもあった。ほとんど国家とも呼べぬちいさな国家から出発し、幕府や藩への〈忠〉しか知らなかった人々を近代国家建設に統合していけたのは、藩主への〈忠〉を天皇への〈孝〉に置き換え、重ね合わせることを可能にした幼い天皇の宗教的権威であった。この宗教的権威を家父長的権威に重ね合わせることで明治国家はがむしゃらな近代化に突き進むことができた。「半日」の高山博士の〈金も何もありやあしない。心と腕とが財産なのだ。それで内ぢゆう揃って、奮闘的生活をしてゐたのだ。その時は希望に光が家に満ちてゐて、親子兄弟が顔を合わせれば笑聲が起こったものだ〉という述懐はまさに明治の前半期の日本という一家族の姿でもあった。帝国憲法も、教育勅語もこの天皇の位置をより確かなものにするものでなければならなかった。天皇は帝国憲法によって法的な絶対的地位を占めると同時に、教育勅語において家父長的家族主義の頂点に立つ。

勅語。朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ渕源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ侍シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳拳服シテ其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

そしてこの制度的強化物である孝明天皇祭の日に高山家の内情が曝されることで、これがたんに高山家の内情ではなく、王政復古という前近代的イデオロギーを核にしての近代化の矛盾が露呈し始めた明治後期の家父長的国家日本の姿が暗喩として浮かび上がってくるのが「半日」という短編だ。

この家父長的国家理念によって押し進められた近代化政策はそれがすすめば進むほど家父長的国家理念との矛盾を拡大してくるようになる。製糸工業を中心とした資本の蓄積がすすむにつれ、様々な社会問題が生じて、日清戦争後には米騒動が多発する。また足尾鉱毒事件が問題化し、労働組合の結成などの社会主義運動の胎動がみられるなど都市と農村の就労形態の急激な変化は多くの社会問題を生んでいく。明治三十三年には治安警察法が公布される。そして日露戦争開戦前夜の明治三十六年には幸徳秋水らが平民社を結成し非戦論と社会主義を主張するなど矛盾は深まっていく。しかしその矛盾を克服するためにはなおいっそうの教育勅語的国家理念の強化が求められた。しかしどんなに国家が家族の価値をうたい、天皇を頂点とする万世一系の国体を称揚

しようとも、あるいは称揚すればするほど、それは維新のころの天皇の役割とは質が違ってしまってくる。帝国憲法によって超法規的地位を占めた天皇はもはや宗教的権威である以上に政治的権力そのものであって、かつて五箇条の御誓文で〈朕、幼弱を以て猝に大統を紹ぎ、爾来、何を以て万国に対立し、列祖に事へ奉らんやと朝夕恐懼に堪ざる也〉と国民に告げ、〈広く会議を興し万機公論に決すべし〉とした天皇ではもはやなかった。

もはやもどらぬ過去と現在の、あるいは夢と現実の矛盾を「半日」は亀裂のままにさらけ出している。このころに書かれた「かのように」も「普請中」も同じだ。「かのように」では歴史と神話の矛盾が、「普請中」では近代化を進める明治日本の矛盾が、それぞれ〈かのように〉という処世術や、〈普請中〉という言葉でなんとかつなぎ止められてはいるが、鷗外自身その言葉が未来を約束するとは考えていない。それはもうすでにこわれている家庭を懸垂状態で維持している高山博士の姿となにも変わらない。〈孝〉そのものに踏み込まなければ高山博士夫婦の溝がうまらないのと同じように、神話と歴史は、あるいは西欧文化と日本文化はたとえどんなに努力しようとそのままでは両立するはずもないのだ。もちろんそれは鷗外も知っている。知っていてただ立ちつくし、広げて見せているだけだ。「普請中」の渡辺参事官の女とのやりとりの不機嫌さからは、彼が普請後の日本に夢を持っているとはとても思えない。

「アメリカへ行くの。日本は駄目だって、ウラヂオで聞いて来たのだから、當にはしなくってっよ。」

「それが好い。ロシアの次はアメリカが好かろう。日本はまだそんなに進んでゐないからなあ。日本はまだ普請中だ。」

「あら。そんな事を仰ると、日本の紳士がかう云ったと、アメリカで話してよ。日本の官吏がと云ひま

せうか。あなた官吏でせう。」
「うむ。官吏だ。」
「お行儀が好くって。」
「恐ろしく好い。本當のフィリステルになり濟ましてゐる。けふの晩飯丈が破格なのだ。」
「難有いわ。」さっきから幾つかの控鈕をはづしてゐた手袋を脱いで、卓越しに右の平手を出すのである。
渡邊は真面目に其手をしっかり握った。手は冷たい。そしてその冷たい手が離れずにゐて、暈の出来たために一倍大きくなったやうな目が、ぢつと渡邊の顔に注がれた。
「キスして上げても好くって。」
渡邊はわざとらしく顔を蹙めた。「ここは日本だ。」
叩かずに戸を開けて、給仕が出て来た。
「お食事が宜しうございます。」
「ここは日本だ」と繰り返しながら渡邊は起って、女を食事のある室へ案内した。*注24

渡邊参事官の〈ここは日本だ〉という言葉は〈普請中〉という言葉とほとんど相いれない響きを持っている。普請中の日本にも、暈の出来た西洋の女にも渡邊参事官の心は動かない。高山博士も、五条秀麿も、渡邊参事官も確かにそれぞれが矛盾の狭間にいて、精一杯努めてはいるが、その努力は矛盾の解決には向かわない。なんとか取り繕っているだけだ。主人公たちの取り繕いを取り繕いのままに投げ出して見せている鷗外の孤独が際だってくる。この現実の矛盾を矛盾のままに放り出す態度が鷗外を自然主義作家に近づけ、口語体にしているのだが、自然主義作家と違って作者鷗外はもがかない。もがくには醒めすぎている。しかしこの覚醒した鷗

外を初期の浪漫的鷗外に比して成熟と呼んでいいのだろうか。むしろやせ衰えてさえ見える。山崎正和のいうように鷗外の「青年」が〈成熟の起こらないビルドゥングス・ロマン〉であり、〈人間が成熟するためには「現在」を過去から引きちぎり、そのなかで過去の意味が逆転するような閉じられた時間を経験しなければならない。それまでの自己がいったん死に、同じ瞬間に新しい自己が蘇生するのが成熟〉[*注25]だとすれば、「青年」の主人公純一にはそうした〈劇的な逆転の瞬間〉がない。それはそのまま鷗外にあてはまる。山崎正和はそれが幼い頃から一家の期待を担い、はやくから家長的役割を担わざるをえなかったことに帰因していると述べている。早くから家長として振る舞わざるをえず、その期待に答えてきたということは、裏返せば親の期待に添う立派な子を演じることでもあった。この家長であることが良い子であるという、子から大人への〈劇的な逆転の瞬間〉を欠いた生がどこか演技めいてきて、やがてみずからの生を自問せざるをえなくなるのは当然の帰結であったとも言える。かつてどこかで子どもの部分を凍結し大人をうまく演じてきたことに復讐されているようなものだ。演じているという感覚しか持てない自分に佇み、鷗外は自問を繰り返している。

併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。その勤めてゐる役の背後に、別に何物かが存在してゐなくてはならないやうに感ぜられる。策うたれ駆られてばかりいる為めに、その何物かが覚醒する暇がないやうに感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生といふのが、皆その役である。赤く黒く塗られてゐる顔をいつか洗って、一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考へてみたい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め續けてゐる。此役が即ち生だとは考へられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思はれる。併しその或る物は目を醒まさう醒まさうと思ひながら、

又してもうとうとして眠ってしまふ。[注26]

この鷗外の内面をもっともよく知り、肌で感じていたのは家族であった。〈愛情のような雰囲気、それは父が一人でつくって、一人で（自分でも知らないで）あたりの妻や子供や家、本、空気にまで振り撒いていただけだ〉[注27]と、あるいは、〈父を愛する女性は不品行な父ではないが、いつまでたっても其の全体を己の物にしたという気にはならない。そこで必然の結果として嫉妬を起こす。それが真面目に受け取られず茶化されるから益々憤激するのである。この事についてある時、祖母が洞察したような言を私にきかせた。「林（りん）の奥さんになる人は皆不幸せで気の毒なのよ。久ちゃんのような人だって、お喜美さんのような人だって林の奥さんになればうまくいかないにきまっているのだから〉[注28]ということになる。そしてこの家族の気持ちはもちろん鷗外に跳ね返るから、鷗外は前にもまして過剰に父であり、子であり夫である自分を献身的なまでに演じて、痛々しいまでの姿をさらすことになる。そうした鷗外の印象的な様子を先妻登志子との子である長男於菟が回想している。

既に結婚して別家していた為に父の家を半分分けて貰って裏合せに住んでゐた私の家の門口をあけて父が入って来た。いつも用があれば呼ばれるのでこんな事は例がない。私が驚いて出てゆくと、格子戸を半分あけた父は出勤の途と見えて背広服に手提鞄をさげてゐる。不安さうな目付きで私を招く。多分私の家の者にも聞かせまいとの心づかいである。私がそつと格子戸の外に出ると小さい声で、「お母さんが大変怒っている。当分うちへ来てはいけない」といふ。「どうして」「何、いつてもいいのだが機嫌を悪くさせない方がいいと思って云はずにおいた。昨日お前の論文が出来たのであんまり嬉しくてつい日記に書いたらそれを見ら

れてしまったのだ」父は泣顔と苦笑とをごたまぜにしたやうな変に歪んだ顔をしてゐる。私は言句もでない。父はすぐ後向きになって私の家の格子戸と門との間の五六間をトボトボあるいて、そっと門をあけて出ていった。その後姿はいかにも哀れな老人の衰えをまざまざ示して私は見るに堪へなかった。*注29

与えられた役分を忠実に果せば果たすほど求めるものは遠ざかり、現実感を喪失するという循環は鷗外を立ち止まらせる。「キタ・セクスアリス」も、「青年」も、「妄想」も、「灰燼」も、すべて希薄になっていく現実をつなぎ止めようとして、どれもこの循環からは抜け出すことができずに、空虚感だけが残っている。鷗外にとってこの空虚さが空虚としてでなく呼吸できる場は明治という現実にはもはやなかった。乃木の殉死を念頭に初稿「興津弥五右衛門の遺書」を仕上げた鷗外は、乃木を演じさせている自分に気づいたのかも知れない。改稿された「興津弥五右衛門の遺書」はもう乃木も、明治も必要ではなく、なによりも演ずる必要もない史料としての顔を持っていた。史料はどんな矛盾も、不合理も飲み込んで存在しているようにみえた。ただ黙って存在し読まれるにまかせていた。真実か否かは問題ではなかった。ただ存在しているだけで自然だった。明治天皇が死に、乃木が殉死して、鷗外もまた明治と自分にひとつの区切りを見つけだした。それが鷗外の歴史小説であった。

**【注と参考文献】**

*注1　第一次鷗外全集著作篇第31巻、三五四頁

*注2　飛鳥井雅道『明治大帝』（ちくま学芸文庫　一九九四年一画地　二七六頁）

＊注3　徳富蘆花『みみずのたはごと』（参照：飛鳥井雅道『明治大帝』三〇二頁）
＊注4　同
＊注5　夏目漱石『こころ』　岩波書店　漱石全集新書版　第十二巻　八九頁
＊注6　同　二三二頁
＊注7　同　二三二頁
＊注8　『興津弥五右衛門の遺書』（岩波第三次鷗外全集第三八巻四九七頁）
＊注9　稲垣達郎『森鷗外の歴史小説』（岩波　一九八七年）
＊注10　柄谷行人『歴史と自然』（「意味という病」河出書房一九七六年所収）
＊注11　岩波第三次鷗外全集第十巻五七三頁
＊注12　『航西日記』（明治文学全集第二七巻森鷗外　筑摩　昭和四十年　三四五頁）　訳は山崎正和『鷗外闘う家長』（新潮文庫）によった。
＊注13　小金井喜美子『森於菟に』（「文学」第四巻第六号所収）
＊注14　『舞姫』（岩波第三次鷗外全集第市巻四二八頁）
＊注15　同　四二九頁
＊注16　同　四二八頁
＊注17　同　四四二頁
＊注18　『舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書』（同　二十二巻　一六三頁）
＊注19　『舞姫』（同　第一巻　四三〇頁）
＊注20　同　四三四頁

＊注21　『半日』（同　第四巻　四七〇頁）
＊注22　同　四七一頁
＊注23　同　四七四頁
＊注24　『普請中』（同　第七巻　八頁）
＊注25　山崎正和『鷗外　闘う家長』（新潮文庫　昭和五五年七月　二四〇頁）
＊注26　『妄想』（第三次鷗外全集第八巻　二〇〇頁）
＊注27　小堀杏奴『晩年の父』（岩波文庫　昭和五十六年）
＊注28　森於菟　『父親としての森鷗外』（ちくま文庫　一九九三年九月　二三七頁）
＊注29　同　一一八頁